今月の範囲

第二部　実践編
第七章　義務の先行
二、道徳としての義務先行

モラロジー研究所の概論講座で使用される改訂『テキスト モラロジー概論』について、今月は道徳実行と「贖罪」「積善」との関係性を図解します。

モラロジーを楽しく、平易に学びたい――。そんな要望にお応えして、この連載では改訂『テキスト モラロジー概論』の内容を図で解説します。ご自身の学習に、あるいは勉強会の資料としてご活用ください。

構成＝「れいろう」編集部

未来へ向かう推進力

――積善と贖罪

研究センター廣池千九郎研究室　宮下和大（みやしたかずひろ）

前号で紹介したように、義務先行とは、さまざまな恩恵に支えられて生きているという自覚のもとに、社会の一員としての責任を自発的に引き受け、率先して果たしていくことを示しています。こうした基本的態度が、社会全体をよりよくし、自分の品性を向上させることは、誰の目にも明らかなものでしょう。

しかし、この見通しのよい道を前進していくのは、なかなか大変です。テキストでは、この道を進んでいくための推進力として、①「善を積む」（積善）、②「罪を贖う」（贖罪）の二つを提示しています。

積善と贖罪はどちらか一方だけでも前進はできますが、一輪車と自転車の違いのように、両輪一体となることで、更に安定し、強い推進力を生みだします。

率先して道徳を実行する人は、その分だけ貴重な経験を積んでいます。こうした経験は、さまざまな実際問題を解決する能力を高め、周囲から信頼され、必要とされる人物になっていきます。こうした信用や信頼こそ、培われた品性や人格と言えるものです。「自分の品性や人格を形作るために、私は率先して貢献しなければならない」という「積善」の自覚は、前に進む力を与えてくれます。

また、さまざまな恩恵に支えられて今の自分があるとわかっている人ほど、自分を振り返って「先人に申しわけない」「お天道さまに申しわけない」と思うものです。「こんな自分だからこそ、率先して貢献しなければならない」という「贖罪」の自覚は、前に進む力となります。

あるいはここでこういう疑問が浮ぶかもしれません。自分の「積善」ばかり意識すると、自分中心になってしまい、一方で自分の「罪」ばかりを意識すると、まるで返済できない莫大な借金を抱えているようで、前に進む気力がなくなってしまうのではないか、と。

しかし、実際には「積善」に基づく実践は「贖罪」にあたる恩恵の理解を深めるものです。また、「贖罪」に基づく実践は「積善」としての人格的完成を促すことにつながっています。「積善」と「贖罪」はそれぞれ異なる一輪車ではありません。それらは自転車のように両輪が一体となることで安定感を生みだし、この道を前進する力を与えてくれているのです。

図21　積善と贖罪が実行の推進力

積善と贖罪は一方だけでも前進はできますが、両輪一体となることで、より道徳実行への道は安定し、強い推進力を生みだします。